
ピース

どらどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ピース

【Nコード】
N9336Z

【作者名】
どろどろ

【あらすじ】
いつもの平和、いつもの日常そんな日々を過ごす少年少女たち。

だがそんな日常が何の因果かある日を境に、壊れていく。

プロローグ（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の想像でできております。
ですから暖かい目で見てくださいとうれしいです！

頑張りますのでよろしくお願いします・・・

プロローグ

ここはとある開発施設

そんな中を必死の形相で逃げ回る数人の制服を着た男女がいた。

男女の手には学生では一生持つことのないであろう、拳銃が握りしめられている

逃げ回るなか、一人が口を開く。

「くそ、あの化け物はいったい何なんだよ!!」

「しるかいな!こつちが聞きたいわ!」

その言葉に関西丸出しの喋り方をしながら、返事を返す。

この男女達は高校生先程まで、つい数時間前まで普通の高校生活を送っていた男女である。

そう、数時間前までは・・・

日常

数時間前

「ふあゝ・・・眠」

ただ今けだるそうに、あくびをしながら5時間目の真っ最中なのに窓の外を見ている少女はここ大内高校の2年生である。

名前は大鳥明日香、顔は綺麗というより可愛いというほうが当てはまり、背が高く170前後のわりには痩せている。

髪型は茶髪で髪は肩あたりまであり胸はそれほどない。

男口調で話すのが特徴的である。

明日香は授業等興味が無いのか自分の窓側の席から、肩肘をつき窓から運動場を見ている。

4

・ 運動場では、隣のクラスが男女混合でサッカーの試合をしている・・・

その中の目の細い女子生徒を見つめながら今度はため息をつく

ため息をつかれた女子生徒は、友人からパスをもらうとドリブルをしながら数人を抜いていく。

そしてゴール前になると、おもいきりシュートした。そのシュー

トはキーパー頭上をこえて入っていく。

それを見た女子生徒は小さくガッツポーズをすると、友人のもとまで向かいハイタッチをかわす。

明日香はそれを見て又ため息をつく。

すると隣の席の生徒が小声で話し掛けた。

「ねえ、ねえ明日香又あゆむちゃんのこと見てんの？」

「別に……、見てねえーよ……」

「いや、見てたよ見てました」

その一言にイライラしながら話返す。

「うるせーよ瑞希、真面目に授業受けとけよ……」

「その言葉そのまま返しますよ、明日香さん」

明日香を楽しそうにからかう少女の名前は道端瑞希^{ミチハタミスギ}、背が低く150前半で背が低いせいもあるが、見た目は中学生とよく間違われるほど童顔である。胸はないにひとしいらしい……
髪型は黒髪をポニーテール
にしている。

明日香達とは小学校からの幼なじみであり親友でもある。

そして、ただ今会話に出ていたあゆむと言う名前の人物は明日香の双子の姉妹である。

まあ、双子といっても二卵性双生児であり顔はほとんど似ていない。

「俺は瑞希より頭いいからいいんだよ、バーカ」

「んなあ！？バカじゃないもん！てか、バカと言うほうがバカなんですよ！？」

その反論に鼻で笑いながら返す

「その発想がバカなんだよ・・・」

「又いった！バカじゃないって言ってるでしょ！！」

「じゃあ、アホだな・・・」

「ならいい・・・わけないでしょ！！」

二人が大声で言い合っている、チヨークが二人に飛んできた。

チヨークは明日香と瑞希の頭に直撃すると、床に落ちる。「ツツ！？」

「あいた！？」

前半が明日香で後半が瑞希・・・

二人にチヨークを直撃させたの勿論この教科の教師

教師は二人を見つめて一言。

「授業中騒いでるんだどっちもバカだ」

そう言ってくるりと黒板に向きなおすと、何事もなかったように授業を再開する。

少しクラスは笑いに包まれたが、教師の人睨みで静まり返る。

明日香は舌打ちをして不服そうに窓側に向きなおし、瑞希は恥ずかしそうにうつむいた。

その後は何事もなく、授業は進み終了のチャイムが鳴り響いた。

チャイムが鳴り終わると女子生徒が2人男子生徒が1人が、瑞希と明日香のそばまで近づいてきた。

「君ら本間にアホやな、さっきは笑わしてもらったわ」

「うるせーよ、似非関西ヤローが」

「誰がや、誰が！ウチは両親ともに関西人です」

「だまれ、俺にとってはお前は一生似非関西弁ヤローなんだよ……」

明日香の一言に関西少女は言い返そうとしたが、それは男子生徒によつて制止される。

「まあまあ、大鳥に大野木その辺でやめとけよ？」

「せやかて、明日香が似非関西弁とか言うから悪いんやで！ 颯太！」

「ハイハイ、大野木さんも颯太君を困らせない困らせない」

「むー、夕貴がそう言うんやったらしゃーないな」

大野木と呼ばれた女子生徒が不服そうにうなづく。「ふん、似非関西弁ヤローは相変わらず夕貴によわいな……」

先程教師にやられたのが納まらないのか、まだ大野木に喧嘩を吹っかける。

「やかましい、それにウチには大野木弘美ちゅーオオノキヒロミう名前があるんや
そう呼べや！」

ただ今自分で自己紹介した女子生徒は明日香や瑞希のクラスメートで、ばりばりの関西弁で喋るのが特徴である。

背は160前半で胸は平均並み？で、見た目はボーイッシュユで髪は金髪のポプカットにしている。

基本的に明るく誰にでもやさしいが、短気なのがきずである。

夕貴とは高校生からでの友人だが、何故か頭があがらない・・・

夕貴こと、野乃原夕貴ノノハラユウキは身長は明日香と同じぐらいで胸は大きいほうらしい。髪は藍色で腰ちかくまである長髪で前髪をピンで留めている。

普段は温厚で怒らないが、怒ると怖いらしい。敬語口調が特徴的である。

そして男子生徒の名前は風上颯太カゼカミソウタ、背は180前半で一般男子生徒のなかでも高いほうである。

顔も整っておりもてるらしいが、本人はどうでもいいらしい。

この顔ぶれの中ではストパー的なポジションである。

普段は無口で冷静だが、今みたいなことがたびたびあるためそのたびに止めている。

「もうやめなさい！！2人とも！みつともないですよ！」

「でも、明日香が・・・」

「でも、明日香がくじゃありません私はやめなさいと言いましたよ大野木さん！」

その何者の追隨をも許さない言葉を言い放ち、弘美を咎める。

「大鳥さんも先程のことで、苛立っているのはわかりますが大野木さんを挑発するのはやめてください！」

「ふん、わかったよ・・・」

明日香はまだ不服そうだが、無理矢理納得した顔をした。

日常（後書き）

えーと、ここまでではストーリーはどろどろでしたでしょうか？

まだまだ続きますので引き続き暖かい目で見てください！

非日常への光

最後の授業は何事もなく何時も道理進んでいく。

明日香は相変わらず外を見ていて、授業を受けるきはないようだ。

教師もそんな明日香を咎めるわけではなく、ただ少し首を傾げ苦笑するだけだった。

そして、本日最終の授業も終了し教科の教師が出ていった。

「ふあゝ、疲れたよゝねえ明日香？」

「別に……、そうでもない……」

瑞希の言葉に素っ気ない態度で返す明日香……

そんな中少し騒がしくなるクラス、だが担任が入ってくることによって静になる。

担任がホームルームを始め、配布物等を配りだす。

すべて配り終わると、明日の予定などを話したがそれは放送によってかき消される。

『ああ、ああ、マイクテストマイクテスト』

その声はこの学校の関係者の声ではなく、担任を含めクラス全体が頭にクエスチョンマークを浮かべる。

『失礼、この学校の生徒諸君および担任又は担当教科の皆様この放送は聞こえていると思います』

『この放送を聞いたもの達は思ったでしょう、お前は誰だと。』

アナウンスをしている人物はまだ話を続ける。

『私は国家から派遣されたものです、何故私がここに派遣されたか・・・疑問に思うでしょうが細かい話は後程体育館でお話しましょう』

『ということ、皆さん今から体育館にお集まりくださいもしこの放送を聞いて帰宅しようと思っているのなら、おやめなさい学校から一歩でも出たら射殺されます・・・、私は皆さん全員が聡明な御方であることを信じていますよ？では体育館でお会いできることを楽しみにしています』

ブツツと放送が切れると、それまで静まり変えていた教室が騒がしくなる。

「あ、明日香今の何なのかな？悪戯？」

「悪戯？悪戯にしては手が込んでないか？」

少し不安そうに聞く瑞希にたいし、冷静に応える明日香

明日香や瑞希が話していることをクラスの人間も話します。

そんな中担任も少し混乱しているのか、おろおろとします。

それを見兼ねた颯太が言葉を放つ。

「先生事実確認行った方がいいんじゃないですか？」

「そ、そうだな、先生が事実確認に行ってくるからそれまで大人しく待ってるように！」

そう返事を返し担任は教室を出ていく。

まだ少しクラスは騒がしかったが、それぞれ友人同士で話をする。

颯太に弘美や夕貴も明日香達のそばまでやってくる。「なんか、大変なことになりそうやな？」

「そうだね、なんか大変なことになりそうね」

「ああ・・・」

明日香、瑞希、弘美のどこかぎこちない会話を聞きつつ少し考えごとをする夕貴と颯太。

それから、幾分か沈黙が流れ気ましくなつたところに顔色の悪い担任が戻ってきた。

「皆今から体育館に移動してくれ、先程の放送は残念ながら事実と

わかった・・・だから早く移動してくれ」

担任の言葉にクラス全体が静まり返り、皆はまるで固まったかのよう
に動けなくなる。

「いいから早く、動くんだ!!」

それを号令に全員の動きが再スタートする。

全員が急ぎながら体育館に向かっていった。

明日香達は体育館に迎う道中他のクラスの人たちとぶつかりながら
進んでいく

そんな中やつのことで体育館に到着し、中に入っていく

中に入るとそこには3年生や2年生、それに1年生の数クラスそれ
に教科の教師やクラス担任が集まっていた。

そうして、目の前には黒い服を着た5〜6人の男たちと先程放送
したであろう黒髪の長い女性がいた。

明日香はそれを見ると不愉快そうに睨み付けクラスメートの中に入
り込んだ。

それから数分で全学年が集まり、放送をした女性が喋りはじめた。

「お忙しい中皆様お集まり頂きありがとうございます、先程ご説明

したとおり私は国家から派遣されたものです」

女は続け様に話す。

「私がここに派遣された理由は実に簡単、日本の子どもたちの学力が落ちていく今日この頃、ある日の晴れた日の会議室であることが話し合われました」

「それは先に言ったように

、日本の子どもたちの学力低下問題です」

女は少し笑いながらはなす

「私達大人がどれだけ頑張っても貴方たち子どもが、頑張らなければ学力は上がりません。」

「そこであることが提案されました、それは全国の高校で学力が低いところの一校生徒たちには消えてもらおう！ということになりました」

「調べたところこの学校の学力が極端に低い、という

「ここまで言えばお分かりいただけていると思います、貴方たちには死んでもらう・・・」

その一言に誰もが真つ青な顔になり、冷や汗をかく。

だが、女はそんなことはお構いなしに冷笑を浮かべながら話を続ける。

「はずだったんですがねえ」

「だったのです？ってことは何かかわったのか？」

女の引つ掛かる言い方に1人の男子生徒が質問する。

その質問にきみの悪い笑みを浮かべながら、答える。

「ええ、そのとおりです・・・実は国家が内密に研究をしていたのがあるのですが、つい1週間前程からそのものたちと連絡が取れなくなっただのです・・・」

「何か問題が起こったのは明白、ですが何分国家秘密レベルになりますと迂闊に手が出せない・・・、そこで考えたのがどうせ消すはずだった命ならば、私達の代わりに仕事をしていただこうと考えたのですお分かりいただけましたか？」

女の話が終わると大勢の生徒が、文句を言い始める

それを見て女はため息をつきながら懐から拳銃を取出し、天井に向けて発泡をした。

「選ばれた時点で貴方たちに拒否権や文句を言う権利はありません、それでも文句のあるものは私の前でいって御覧なさい」

女の言葉と行動に完全に静まり返かえる、ただ1人を除いてわ。

「あるよ、文句ぐらい・・・」

その言葉を聞き、その場にいた全員が振り返った。

そこには明日香がいた。

「貴方名前は？」

女は眉をひそめながら質問をした。

「てめえーが名乗ってねえーのに、何で俺だけ名乗らなくてはならないだよ？バカかお前は……」

明日香はさらに挑発しながら気だるそうに言い返す。

「おやおや、それは失礼……私の名前はオオクラシズミ大蔵静海です以後お見知りおきを……、貴方がこの後も生きていければの話ですが……で名前は？」

大蔵と名乗った女はは少し冷笑を浮かべながら答える。

「俺の名前は大鳥明日香だ……、別に覚えてなくてもいいよ……覚えられても気持ち悪いだけだし……」

なおも挑発する様子を見て、瑞希や弘美はおろおろと動揺しだし夕貴心配そう見つめ颯太は成り行きを見守っている。

「クスクス、面白い御方ですね貴方には私の手に持っているものが何かお理解できないですか？」

と、手にもっている拳銃をヒラヒラと振ってみせる。
それを見て明日香は鼻で笑い飛ばす。

「ふん、拳銃見せびらかしてりゃびびると思うなよ単細胞が・・・」
そう言いながら明日香は何を思ったか、自分から大蔵の前まで向かいだしたがしかし瑞希に腕を捕まれとめられた。瑞希は明日香を見つめると、視線で行くなと訴えた。

それを感じ取った明日香は腕を剥がすと、瑞樹の頬をやさしく撫でほほ笑みながら言い放つ。

「大丈夫だよ、死にはしねえーから」

瑞希瞳を潤ませながら見つめ、顔を伏せた。

「大丈夫気持ち悪い面見てくるだけだ。」

そういつて、瑞希の頬から手を離し迷いのない足取りで大蔵の前までいく。

明日香に歩みよられた大蔵は、少し目を見開いたがまだなおも余裕そうな笑みを浮かべる。

「貴方をここに来るように呼んだ覚えはないのですが？何かご用ですか？」

その質問に明日香はバカにした笑みで言い返す。

「用がないならこねえーよ」

「フフ、面白い子ですねして何のご用ですか？」

明日香の毅然とした態度が面白いのか、尚も笑みを浮かべる。

それを見て不愉快そうに眉間にシワを寄せる明日香。

「いちいち笑うな、気持ち悪い」

その一言に大蔵はピクリと眉を動かすが、すぐに先ほどの笑みに戻る。

「で、用件わ？」

「瑞希にもいったがお前の気持ち悪い顔を拝みに来たただけだ。」

明日香のその言葉に、今まで微動だにしなかった大蔵の後ろにいた人間が懐に手をいれ出す。

大蔵はそれを片手で制すと、笑いながら答える

「そうですね、なかなかの根性していただけますねでも・・・」

そこで言葉を切ると、大蔵自分が持っていた拳銃を明日香の額に突きつける。

「こんな状態になってもそんな減らず口が叩けますかねえ」

大蔵のその行動に明日香を覗く生徒や教師の顔が青ざめていく。

だが、とうの本人はと言うと・・・

「撃てよ、さあ撃ってみるよ」

突きけられているにも関わらず、尚も毅然とした態度をとる。

「脅しだと思っっているんですか？」

明日香の態度に面白くなさそうにいう大蔵。

「思ってねえーよ、何でもいいから撃てよ」

「いいでしょう、そんなに撃たれたいならお望みどおりに」

そついいながら、冷静に引き金に指をかける。

明日香以外の生徒と教師は見る見る青ざめていく。

「さようなら大鳥さん・・・」

その一言ともにパーンと乾いた銃声が広がる。

「明日香ああー!!」

瑞樹は悲鳴にも近い明日香を呼ぶ。

「何だよ瑞樹、うるさいな」

明日香は大蔵の方を見ながら、瑞樹に返事を返す。

「クスクス、撃たれても怯みもしないのですおもしろいおかただ」

まだ銃口から消えてない煙を見つめながら、笑みを深めながら言う。

「撃つ直前に額から銃口そらされたのわかってんのに、なんで怯まなきゃいけないだよ……」

明日香が言ったとおり、大蔵は撃つ直前に額から右頬あたにずらしたのだ。

まあ、当然右頬をかすめて血はでてているが明日香は何事もなかったように大蔵をにらみつける。

「普通は腰ぐらいぬかすものですけどね……」

大蔵は目を細目ながら、明日香を見つめる。

「知るかよ、そんな普通……」

明日香はめんどくさそうにそう言うと、ため息をつく。

「クスクス、そうですか本当に面白い人だ初めてですよ……」

大蔵の何か言いたげな笑みに明日香は、不機嫌に聞き返す。

「何がだよ……」

「ここで殺してしまうのは、惜しいと思った人間は……貴女には是非行つてほしいですね……」

大蔵は人差し指を顎に当てると、楽しそうにつぶやく。

「大鳥さん、貴女はこんなところで死ぬ人間ではありません。是非私が指示する場所に向かつていただきたい！」

そう言つと拳銃を懐に直し、くるりと後ろに振り替える。

「拒否権わ？」

顔だけ振りむかせ、冷笑で一言

「あるとおおもいで？」

非日常への光（後書き）

あはは、少し長めに書いてみましたどうでしたか？

コメントなど書いてくれると嬉しいです。

おかしいてんなど、指摘のコメントなどもお待ちしております。

引き続き見てください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9336z/>

ピース

2011年12月29日11時47分発行